

結果を、山国・相楽・丹後の三林業地帯で代表させ、とくに、商品生産の発展の遅れていた丹後ではほとんど官没がなく、それに対して商品生産の発展の進んでいた相楽で官没がみられる「逆転現象」を、耕地と私有林との補定・結合関係の中での入会利用の多様性という観点から、農民的商品流通の概念を拡大することから説明されようとしている。

以上が簡単な素描であるが、本書について三橋時雄氏がその書評(『書斎の窓』No. 二四五)で述べられているように、「本書は京都府下での改租と官民有区分を包括的に実証して、そこでの特殊性を見出し、その理由を検討するとともに、林業の『発展』に対する新しい見解の提示とそれに基づく分析が試みられている」ものであって、今後の地租改正研究に一石を投じたものといえよう。ただ、一言私見を述べると、幾多の変遷を経て決定された地価の本質をいかに把握するのか、そのことが、地租軽減運動、地価修正運動といかにかわるのかについてよりつつこんだ究明が必要だと思われ、また林野の官民有区分については、農民の再生産構造の中での林野の占める位置と、それを基盤に展開される人民

の運動をその民属・官没決定の大きな要因としておさえることが必要ではないかと思われる。

〔A5版 八五四頁 一九七五年二月
有斐閣発行 一、〇〇〇円〕(猪飼
隆明・京都大学研修員)

和歌山県史編さん委員会編

和歌山県史 中世史料一

紀伊の中世文書といえは、高野山金剛峯寺に伝来されてきた「宝簡集」「統宝簡集」「又統宝簡集」を中心とする大日本古文書『高野山文書』、および山内諸塔頭史料を含む中田法寿氏編『高野山文書』を誰しも思うかべるが、今般、『和歌山県史』中の一冊として刊行された「中世史料一」は、右の『高野山文書』のうち旧領内文書を修訂増補して再録したほかは、紀ノ川流域の在地文書を新たに多数紹介、活字化されていて、この地の荘園史研究には見逃すことのできない史料集である。

紀ノ川流域一帯を包含する紀伊北部は、東寺領荘園(若狹太良庄、丹波大山庄等)と並んで荘園史研究の最も蓄積されてきた地域で、江頭恒治氏「高野山領荘園の研究」

をはじめ、すでに戦前から多くの業績が発表されており、地理学の分野からも「河谷の歴史地理」がその研究成果として公刊されている。和歌山県では、文化財保存事業として昭和四〇年度から、紀ノ川・有田川・日高川流域等を重点に古文書調査を実施してこられたが、この「中世史料一」はその調査の総合報告書を兼ねる意味も有しているとのことである。それだけに、多数の新発見文書を含む在地文書が、厳密な史料批判、吟味を経て公刊されたことは、該地域の中世に於ける実態究明に大きく裨益するものとして慶賀したい。

次に内容に触れると、本巻の構成は高野山山内所在文書を除く県内在地文書(かつて所在した文書も含む)のうち伊都・那賀両郡の中世文書を二〇家に分ち、各家別編年に配列する体裁をとっている。時代は平安中期の正暦二(九九一)年から、豊臣政権末期の文禄五(一五九六)年に及ぶ。中世の終末を文禄五年とされた根拠は今一つ明らかではない。あるいは文禄検地の施行を以て一応の中世終焉と考えられたかとも思われる。さて本史料集に収められている家別文書のうち最大のもは粉河東村王子

神社文書の二六九点、ついで隅田葛原家文書の二三三点、以下西光寺文書の一二〇点等の順となっているが、量的には室町期の田畠納帳を含む頼淵八幡神社文書の方が西光寺文書よりはるかに大であり、この葛原・王子・頼淵の三家文書だけで全体の半分以上を占めている。その葛原家文書をはじめ、隅田地区では隅田八幡神社文書、六坊家共有文書以下六家の文書が収録されたため、石清水八幡宮領紀伊隅田荘および隅田党関係文書群が本巻に網羅されることになった。この中で葛原家文書所収の宝治・建長の検田取帳は中田氏編『高野山文書』にも採録されていない新史料で、鎌倉初期の隅田北庄の名田の実態、経営内容が伺われる史料として注目に値する。また利生護國寺文書所収の数点の南朝論旨は、従来から知られてはいたが、長慶天皇在位期間に推定の手がかりを与えた文書として興味深い。粉河地区に入って粉河寺関係文書は秀吉の焼打ちにより残存点数は少ないが、南北朝末室町初期にかけてこの地の守護であった大内氏の文書が若干ある。王子神社文書では宝月圭吾氏により一部紹介された池水配分関係の文書が注目される。なお粉河寺文書二一〇ニ文書を幕府奉行人とされるが、

大内氏奉行人の可能性もあり、巻末に花押影の写真を載せて頂きたかった。安楽河・頼淵地区では頼淵八幡神社文書が全国的にも数少ない惣の文書として貴重であるが、室町中期の土地台帳類が新たに紹介されたほか、正平十一年の木札惣荘置文、ならびに大和絵史上からも注目すべき「八幡縁起絵巻」が写真入りで収載されている。また全巻通じて畠山氏関係文書が散見されるが、河内・紀伊に於る畠山氏守護領国の実態究明は、従来殆んど未開拓であるだけに今後の課題として本巻の史料価値は大きい。

〔A5版 図版八頁 目次三七頁 本文八五六頁 一九七五年三月 和歌山県発行 三、〇〇〇円〕（今谷 明 京都大学大学院生）

編集後記

桜の花が咲く季節となりました。皆様には益々御健勝のこととお慶び申しあげます。五九巻二号をお届けします。史林の発行も今号よりほぼ定期刊行と相成りました。これも会員皆様の御協力の賜であると感謝致しております。今後はこのペースを守って、よりよき雑誌を目ざして頑張るつもりです。今号には、藤枝先生の国際歴史学界の動向

に関する貴重な御報告を掲載することが出来ました。今後史林が国内雑誌に留まらず海外に普及するためにも、このような報告を数多く掲載する予定です。また会員諸氏におかれましても、編集部にとしどし御意見を寄せて下さい。

（大谷）

一九七六年三月二十五日印刷
一九七六年三月一日発行 定価七五〇円

史 林 （第五九巻第二号）

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部

発行人 史 学 研 究 会

理事長 今 津 晃
振替京都五一五五番

印刷所

京都市下京区七条御所ノ内中町五〇
中村印刷株式会社